

## 令和元年度 学校経営報告書（自己評価）

学校名	富士市立高等学校	校長名	岩田 享
-----	----------	-----	------

評価	基準	評価	基準
A	十分目標を達成することができた	C	あまり目標を達成することができなかった
B	おおむね目標を達成することができた	D	ほとんど目標を達成することができなかった

本年度の取組（重点目標はゴシック体で記載）

	取組目標	成果目標	達成状況	評価	成果と課題
<b>ア</b>	<b>生活及び 学習習慣 の 確立</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学期毎、各クラス延べ欠席数 20 人以内、延べ遅刻数 5 人以内（入院等の長欠者を除く）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>長欠傾向の生徒を除いた欠席者の学期毎の延べ数は、ほとんどのクラスが 20 人以内である。</li> <li>遅刻は半分以上のクラスが 5 人以内。</li> </ul>	教務 B	長欠傾向の生徒以外では安易な欠席・遅刻はほとんどなくなった。複数のクラスにおいて長欠傾向の生徒がみられるため、その指導を組織的・継続的に今後も続けたい。
		<ul style="list-style-type: none"> <li>平均 2 時間以上の家庭学習を行う生徒 60%</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>平均 2 時間以上の家庭学習を行う生徒は 31.3% だった。</li> <li>平均 90 分以上の家庭学習を行う生徒は 54.3% だった。</li> </ul>	教務 D	全体で 3 割であった。ビジネス・スポーツはほとんどのクラスで 10 人以下。3 年総合探究科は 8 割の生徒が達成することができた。更なる呼びかけが必要である。
		<ul style="list-style-type: none"> <li>「週 5 日以上、家で勉強している」生徒 80%</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「週 5 日以上、家で勉強している」と答えた生徒は 55.5% だった。</li> </ul>	教務 D	昨年度よりも 5% ほど低下した。各教科で家庭学習につながるような課題の設定や啓発が必要である。
<b>ア</b>	<b>魅力あ る授業と 実践と 授業力 向上</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「授業の内容が分かる」生徒 70%</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>全体：62.5%</li> <li>1年：58.4%</li> <li>2年：63.4%</li> <li>3年：65.7%</li> </ul>	教務 C	全教科において、生徒にとって分かりやすい授業づくりを心掛けて改善していく必要がある。
		<ul style="list-style-type: none"> <li>授業評価目標達成率（75%）に到達した教員 80%</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>H30 年度 75.0%</li> <li>R 元年度 86.8%</li> </ul> <p>昨年度に比べて授業評価目標達成に到達した教員の割合は大幅に上昇した。</p>	企画 A	本年度、大きく改善したのは、各教員が創意工夫を凝らして深い学びにつながる授業や受験学力をつける授業を行った結果、生徒が学びの効果を実感できたためと思われる。今後も引き続き、授業改善に努める必要がある。

イ	学校の安心安全と生徒・職員の健康増進	・自転車安全指導カード年間50件以内	1/8 現在 自転車指導カード 34件	生徒 B	指導切符は減少したが、登下校時のマナー違反による苦情があった。
		・自転車事故件数 昨年度より減 H30 24件	1/8 現在 事故件数14件	生徒 B	昨年より事故は減少傾向にあるが、対車両の事故が多く、大事故に繋がる危険性のある事故もあった。
		・「学校に困ったことや悩み事を相談できる人がいる」生徒90%	全体 82.7% 1年 77.4% 2年 84.3% 3年 86.1%	教育相談 C	人間関係を築くには時間がかかる。生徒の様子を辛抱強く観察し、必要な声かけを行い、信用を重ねることが解決策になっていくと考えられる。学年が上がるに従い数値は上がっているため、時間をかけて達成したい。
		・学年別に実施する保健講座後の意識向上率20%	1年生テーマ「高校2年生が性関係を持つことについてどう思うか」で「よくない」と答えた生徒の割合が38.9%向上し、58.3%に達した。	保健環境 A	目的の意識向上率を達成することができた。性の問題は思春期の生徒にとっては最も身近に関心がある問題である。来年度も継続して啓蒙を図りたい。
		・いじめ・体罰の撲滅	いじめ・体罰についてはアンケート調査を実施し、対応した。また、集会や学校からの便りで人権尊重の意識を高めるよう指導した。	教頭 B	いじめ・体罰撲滅に向けて絶えず呼びかけを行う。
		・週3日以上午後8時以降に残留する職員の減少	週3日以上午後8時以降に残留すると答えた職員の割合は昨年度に比べ微減にとどまった。正担任で残留する職員数が増加した。	副校長 C	学校の魅力化を図りながら業務を削減することが難しい。教職員間で業務の平準化を図っていく必要がある。
ウ	高い志と実進の現れた進路及び向上	・1年次末での進路目標未定者10%以下	第3回進路希望調査(1月)で、すべてが未定と答えた生徒15人(6.6%)	キャリア A	進学を希望する生徒の中にも、具体的な校種、学部・学科が未定の生徒が48人(21.1%)いるため、面談等を通じて引き続き生徒一人ひとりに応じた進路指導を継続したい。
		・「自分の将来に対する、はっきりとした夢や希望を持っている」生徒80%	63.9%	キャリア C	様々な進路行事を通して、明確な進路目標を持たせ、学習や行事に前向きに取り組む雰囲気を作る指導を行う必要がある。

様式第3号

		<ul style="list-style-type: none"> <li>「学校で勉強した内容をきっかけにもっと知りたいと思う事が増えた」生徒 60%</li> </ul>	48.4% 昨年度の 51.6%から減少した。	教頭 企画 研究 C	教員一人一人が、生徒の知的好奇心を伸ばすための方策を工夫し、魅力ある授業を構築する必要がある。
		<ul style="list-style-type: none"> <li>校外模試の全国偏差値 50 以上の人数及び平均点偏差値の維持</li> </ul>	進研模試国数英合計 偏差値 50 以上の人数 1年：7月から 11月にかけて増加 2年：7月から 11月にかけて微減 (昨年 1 月よりは増加) 平均偏差値 1年：7月から 11月にかけて上昇 2年：7月から 11月にかけて横ばい	学力向 上対策  B	1 月進研模試の結果がまだでていないが、おおむね校外模試の全国偏差値 50 以上の人数及び平均点偏差値の維持ができています。 年間を通じて模試の結果分析・対策の実施・検証のサイクルを強めていく必要がある。
		<ul style="list-style-type: none"> <li>四大進学 100 名以上、就職内定率 100%</li> </ul>	四大進学予定者 80 名 就職内定率 100% (1 月 22 日現在)	キャ リア  B	一般入試出願者を合わせても 100 名に満たない見込みである。大学進学を希望していたが、専門学校等に進路変更した生徒もいた。受験に対応できる学力の育成と最後まで諦めさせない指導が必要である。就職は希望者すべてが内定をいただいた。
		<ul style="list-style-type: none"> <li>簿記検定 1 級合格率 80% 及び全商検定 1 級 3 種目以上合格者 20 名以上</li> </ul>	簿記検定 1 級合格率は 60% だった。全商検定 1 級 3 種目以上合格者は 22 名だった。	ビジ ネス 探究  B	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒は上級資格取得に対して積極的に取り組み、きめ細かい指導が出来た。</li> <li>低学年時における指導方法の強化と基礎知識の習得が必要。</li> </ul>
ウ	富士市立高等学校改革実施計画の検証と大学入学者選抜改革に向けた準備	<ul style="list-style-type: none"> <li>校内検証報告書の検討及び今後の方向性と具体的取組についての検討</li> </ul>	検証計画に則り、校内での報告書を作成し、市教委に報告を行った。現在、報告書を元に有識者会議で検討中である。	指導 主事 B	<ul style="list-style-type: none"> <li>報告をまとめるなかで、学校改革 10 年の歩みを確認することができた。</li> <li>改革実施計画の今後の位置づけ、学校の方向性について、検討と共通理解が必要である。</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>新教育課程の原案作成</li> </ul>	3 学科の原案を作成し、教育課程検討委員会で問題点・改善点を検討中である。	教務  B	3 学科とも新教育課程の趣旨を踏まえたカリキュラムづくりをする必要がある。
		<ul style="list-style-type: none"> <li>英語資格・検定試験の準 2 級以上の受験者 150 人、合格率 60%</li> </ul>	受験者数 158 名  合格者については、第 3 回の結果待ち。(第 2 回までで 33%)	英語科  C	現 2 年生から外部検定の取扱が進路に利用されるという話題も受験者数に影響を与えたと考えられる。補講なども準備してはいるが、個々の学習が不

					可欠なので、家庭などで検定に向けた取り組みができるよう指導したい。
エ	生徒の自主性・協調性及び目標に向かって挑戦する意欲と態度を育む	・「課題解決の道筋を予測し、課題を解決するための計画を立てることができる」生徒75%	・アンケート調査での3年生の回答は75.7%と目標を達成することができた。	企画 研究 指導 主事  A	・探究学習において、「論理的な道筋の予測」はディベート、「課題解決のための計画」は市役所プランで主に扱っているが、そのことをより意識的に生徒に伝え、定着と活用を図ることが今後必要である。
		・「学校行事・部活動に満足している」生徒90%	アンケート調査での回答 「学校行事に満足している」91.9% 「部活動に満足している」80.3%	教頭 生徒  B	・部活動ではシラバスを示してはいるが、活動内容に満足がいかない生徒もいる。生徒の主体的な活動を支援していく必要がある。
		・海外探究研修の充実(生徒の満足度90%)	・生徒参加率 100% ・生徒満足度 99%	総合 探究  A	・夏期集中研修から引き続き準備を進める中で、実践英語に多く触れることができた。 ・日米の文化や教育の違いを目の当たりにして、価値観の違いや共通点を改めて感じることができた。 ・大雪により現地高校へは訪問できなかったが、事前から各個人間でメールのやりとりが行われていたので、ホテルまで赴いてくれる現地高校生もいて、改めて交流の大切さを知った。
			・生徒参加率 100% ・生徒満足度 99%	ビジ ネス 探究  A	・事前研修の成果が満足度に反映させている。 ・英語、中国語会話を現地で実践出来、マーケティング研修、企業研修、学校交流と多分野による研修が実施出来た。 ・学校交流プログラムの進化。
			・生徒参加率 100% ・生徒満足度 99%	スポ ーツ 探究  A	・スポーツ交流は、スポーツのあり方について多くの刺激を受け充実した研修となった。 ・事前研修の成果が表れ、実際に体験し確信したことや多くの新たな気づきがあり、持ち帰って事後研修や授業の中で活かすことができた。 ・同世代の学生をはじめ様々な世代の学生と交流ができた。

様式第3号

オ	家庭・P T A 組 織・中 学 校・地 域 と の 連 携	・P T A 総会の出席率 50%	37.1%と今年度も目標の 50%を割り込んだ。	総務 C	開催時間・曜日など工夫しているが半数にも満たない年が続いている。
		・学年学科別懇談会の出席率 60%	71.2%と目標を達成することができた。	総務 A	本校独自のやり方で集まりやすく工夫しているため、保護者にも好評である。
		・「本校が地域に開かれた学校と感じる」保護者 85%	94.8%と目標を大きく上回る結果であった。	教頭 A	「地域との連携」は本校の教育目標の柱の一つであり、地域との交流事業については今後も積極的に広報活動を進める。
		・地域交流の実績 40 回以上	人工芝で遊ぼう 2 回 ナイトウォーク 1 回 コミュニティ講座 1 回、多世代交流サッカー 20 回、吹奏楽部 11 回、チア部 15 回 ビジネス部 35 回	地域 交流  A	地域交流事業の人工芝で遊ぼう、ナイトウォークは地区のイベントとして成長し好評である。吹奏楽部が実施している中学生対象の技術向上練習会も好評である。
		・「学校運営協議会の提言が学校運営に反映されている」と回答する委員 80%	「学校運営協議会の提言が学校運営に反映されている」と回答した委員 100%	副校長 A	引き続き、委員の提言を学校運営に活かしていく。
		・体育館・グラウンドの一般開放年間 200 日以上	体育館開放日数 243 日 グラウンド開放日数 347 日	事務 A	体育館・グラウンドともに一般開放による利用日数で目標を上回ることができた。
		・庭球場の一般開放年間 90 日以上	庭球場開放日数 123 日	事務 A	週 3 回(月、水、木)の施設開放となり、目標の年間 90 日以上開放をすることができた。
オ	適正な事務の執行	・1 月末現在のスクールバス利用者 60 人	H31. 1 2 路線 58 人利用 R 2. 1 2 路線 54 人利用	事務  B	大淵・厚原線及び富士川・中央線の 2 路線で利用者数は 54 人で、目標値及び昨年度実績値を下回ったが、収支均衡し、安定した運行ができた。
		・食堂利用者の満足度 80%	味の満足度 91.1% 量の満足度 88.6% 価格の満足度 91.1%	事務 A	味、分量、価格いずれも満足度はいずれも 80%を超えることができた。
		・電気使用量を前年度比 3%削減	H30. 4~12 月 491,007KWH H31. 4~R 元. 12 月 477,469KWH	事務  B	前年比△13,538KWT(△2.75%) 通年での放課後の教室施錠で使用電気が減っている。
		・コピー機の利用枚数を前年度比減	H30. 4~12 月 1,679,000 枚 H31. 4~R 元. 12 月 1,884,875 枚 (いずれも A 4 判換算)	事務  D	前年比+205,875 枚(+12.3%) 紙使用量が大幅に増加した。